

学科目（当学院独自の特殊科目を最後に記入し、他の学科目は看護婦学校養成所規則別表3の配列により記入することにしたものである）	第1学年		第2学年		第3学年		3年間の総時間数	備考（学科目の時間外に科目の一課程としての施設見学、個人及び集団研究の宿題、Reportの発表、講評の時間数のみ記入、学科目の内容中特に記す必要のある実験、討議の時間のみ記入）
	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
眼科学			10	10			20	当病院の患者に関する医師の記録する諸記録がドイツ語であるのでそれを理解できて「看護」に事欠かぬため。
耳鼻咽喉科学			20	5			25	
歯科学（口腔衛生を含む）			10				10	
皮膚科学		15	10				25	
泌尿器科学（性病を含む）				25			25	
理学療法（放射線医学を含む）				20	25		45	
外国語 英語	40	40	40	40	30	30	250	
ドイツ語	20	20	20	20			80	
体育	20	20	20	20	18	17	115	
音楽	25	20	20	20	18	17	120	
病棟管理、看護管理					10	5	15	近代病院の使命、我が国の病院と諸外国の病院との比較、人事管理、業務の把握など。
特別講演 (1) 病院管理				3	12		15	
郵政事業大意								
特別講演・	5	10	5	10	10	5	45	各学年学期始め、学期終了時に学院長より講演（倫理、哲学、文学、政治経済的な問題、時事解説、法などについてそのときときに学習上必要な事項）

(東京通信病院付属看護学院教務長)

編集デスク <12>

この間大阪に出張した時に、新大阪ホテルで三木行治岡山県知事とはからず顔面を合わせた。短軀肥体の三木知事は、どこにいてもすぐ目につく。しかも、いつも人なつこい微笑を浮かべている。

三木博士は、今は岡山県知事におさまって、名知事のほまれ高い。これは、知事選の応援の弁などでは毛頭ない。その必要が全くないほど三木知事の岡山県における声望は大きく、選挙運動の必要などはないであろう。

三木博士と会ったのは、三木知事がドクターだからである。当時は、といっても、知事になる前だが、厚生省の公衆衛生局長をしておられた頃は、仕事の都合でよくおめにかかったものである。「看護学雑誌」や「保健婦雑誌」は、三木博士の示唆

によって、編集上のアイデアがきめられたこともあったからである。その当時の厚生省はまだ、今のようやや見られるようになった建物ではなく、旧海軍省の建物をゆすり受けたままの暗い、そして階段だけがやけに高い憂鬱な建物であった。5階などといったら、おそらくほかの建物の7階ぐらいに相当するものではなかったか。そして、たしか、エレベーターなどもなかったのである。

三木岡山県知事との5分間

長谷川 泉

三木知事はドクター出の行政官であるから、たんに岡山県の治績があがっているばかりでなく衛生行政の方も進んでいるようである。この間新聞に報じられていたところでも、開眼検診を積極的に進めて、赤木岡山大学教授が開眼手術をし、その成績が期待されていることが知られてい

る。三木博士に会った時も、新聞にそのことが大きく出てますよと言ったら、博士はまだその新聞をごらんになっていなかったようで、どの新聞に報道されたかを聞かれていた。

夜おそくまで、いろいろ参考になる意見をうかがった昔のことがなつかしく思い出された。その頃、医学書院にはまだ「看護学雑誌」と「保健婦雑誌」しかなかったが、その後「助産婦雑誌」「看護教育」も刊行され、指導者のための「看護教育」という雑誌さえも誕生して躍進の一途を辿っている。あの頃では、「看護教育」などという雑誌の刊行は夢想もできなかった。看護界も変わった。進歩したものである。あわただしい立ち話で別れたが、三木知事は、知事さんらしく要領よく施政のかん所を語り、私は、岡山県を訪れることを約した。いずれ大阪でなく岡山で、三木知事のお手なみを拝見したい。